

ふるさとの 其の28 誇り

掘り出された歴史 — 寺部地区の古墳群 —



発見された古墳群

近年まで、何も無い砂礫（されき）の大地と思われていた御勅使川扇状地。しかし、最近の発掘調査で、特にその先端部は、南アルプス市有数の遺跡の集中地であることがわかってきました。今回はその象徴ともいえる寺部地区で発見された古墳群について紹介します。

遺跡の発見の経緯は、道路の建設でした。現在の寺部集落すぐ北側で行われた新山梨環状線の建設に先立つ遺跡の発掘調査（寺部村附第6遺跡）によって3基の古墳（こふん）が発見されました。

古墳は、直径10〜16m程の円形で周囲に幅2m程の溝が巡らされています。その中心には、人が埋葬されていたものと思われていますが、すでに上面は削られ墳丘は残っていませんでした。

しかし、この内、一番大きな墳墓（1号墳）から、須恵器（すえき）と呼ばれる土器の甕（なめ）と甗（はちまき）が、儀式のためでしょうが、周囲にめぐらせた溝の内に故意に破砕され破棄された状態で発見されました。

須恵器は、5世紀前半頃、朝鮮半島から日本に伝わった「窯」を用いた焼き方により、それまでの野焼きに比べて格段に高い、1000度以上の高温で焼かれた土器です。それまでの赤褐色で軟質な土器と違い、青灰色で非常に硬質なのが特徴で、この技術が伝えられた当時は大変な貴重品でした。

寺部村附第6遺跡で発見された須恵器は、現在の大阪府で造られたものと考えられ、その形から5世紀中頃（今から1500年程前）に造られたものといえます。それは、須恵器のなかでも、窯を造る技術が日本に伝わって間もない時期のものであり、特に貴重です。また、この時期、須恵器は古墳の副葬品などに使われた例が殆どで、一般の集落からの出土することはまれです。そして当時の交通事情を考えれば、近畿地方から、直線距離でも



須恵器甕（すえきはそう）



須恵器甕（すえきかめ）



寺部村附第6遺跡1号墳

300kmほどの距離を現在では想像もできないような苦勞を重ねてここまで運ばれてきたことがわかります。

古墳に埋葬された人々は王様、とまではいきませんが、地域でかなり大きな実力を持っていた人物であるといえそうです。そして、このような人物を支える背景として、この地域にはたくさんの人々とそれを束ねた人々の権力を支える豊かな生活基盤がなければなりません。

現在、砂礫に埋もれてしまっている、御勅使川扇状地末端部ですが、そこには今にも増して豊かな暮らしがあったことを、寺部地区の古墳群は教えてくれるのです。

※2 甕（はそう）は、胴部に小さな円孔をあけた壺形または樽形の土器で、竹などで作った管を円孔に取り付けて液体を注いだと考えられています。

※1 発見された古墳は、高い塚をもたないことから、低墳丘古墳などと呼ばれています。